

喫茶ロビー



水滴は岩をも穿つ

2012年6月22日、米国・アリゾナ州フェニックス市で開催された国際潜水・高気圧環境医学会において、二つの表彰を受けた。一つは学術賞であり、私が九州労災病院に赴任した1972年当時、院長であり、九州大学名誉教授でもある天児民和先生の指導の下、潜水士や潜函工に診られる減圧性骨壊死、潜水病の研究をし、故郷の中津で病院を開業してからもその研究を継続してきたことが評価の対象となったようである。

最初はこのような病気があることすら知らなかったが、診療・手術などの通常勤務は夜の11時頃まで行い、それが終わってから有明海のダイバーの潜水病や骨の検診結果の整理、また動物実験などの研究に追われていた毎日を改めて思い浮かべた。その当時はこのような病気があることすら認められておらず、この病気になったダイバーたちは職業病とは認定されず、経済的にも精神的にも苦勞していた。その状況を見てなんとかしなければ、ということで有明海のダイバーの検診に行ったところ、約300名の潜水漁民のうちなんと約60%に骨壊死があることがわかった。この骨壊死を職業病として認定させるには、それなりの研究業績が必要ということであった。潜水病の集団検診や動物実験などの資料のみならず、海外の文献、ならびにニューキャッスル大学(英国)のデニス・ウォルダー教授の潜函病の骨壊死の研究レポートやマイクロフィルムなどの資料提供によって、ようやく1975年に減圧性骨壊死を我が国で初めての職業病として認定してもらうことに成功した。それ以来、この病気の病因論的、臨床的、予防医学的研究を続けてきた。1981年、病院を開業してからも15年間に渡り Wisconsin 州立大学のチャールズ・レーナー博

士、鹿児島大学・北野元生教授(当時、九州労災病院部長)と共同研究を続け、また東京医科歯科大学・眞野喜洋教授の協力による有明海の潜水データをレーナー博士に送り、減圧性骨壊死を羊に発症させることに成功した。

次第にこの病気の原因が単なる気泡塞栓のみならず、血小板血栓を中心とした凝固系の亢進によるものであるということも明らかになり、オンタリオ大学のリチャード・B・フィルプ教授の電子顕微鏡における実験的研究でも立証された。さらに、その気泡による血小板の凝集がサイトカインの放出によるものであることをペンシルベニア大学のステーブ・トム教授らが明らかにし、我々のやってきたことが分子科学的レベルおよび電子顕微鏡レベルでも検証されてきたことで、この学術賞を頂いた。さらに二つめの表彰として、日本人として最初の特別名誉会員に認定された。

私は休暇の日曜日に中津に帰る度に、12代以上も続いた村上医家などの医学史調査を行っていた。文政11年(1829年)にシーボルト事件が起きた時、彼の一番弟子であった高野長英が長崎からいち早く中津に難を逃れて、この村上医家に潜伏していたことがわかった。村上医家の蔵の中の資料に、「最後までやり抜かなければ、最初からやらない方がよい」という学問訓が出てきた。早速、高野長英の故郷である水沢に行き、高野長英資料館を訪れたところ、「水滴は石をも穿つ」という書が残されていた。小さな水滴でも何千、何万年と落ち続ければ石をも貫通させることができる。つまり、ほんのわずかな努力であっても絶え間なく続けることで、不可能と思えることでも可能になるということである。私は「石」より「岩」の方がより訴求力があると思い、『水滴は岩をも穿つ』(梓書院)のタイトルで自費出版をした。若い時は、つまらないとか、やりがいがないとか、今までやったことのない未知のものに対して戸惑う仕事や研究を指示・指導されることが多い。しかし、それを拒まずコツコツとやっていると思わぬ世界が広がって来ることがあるが、それがこの言葉の意味であったと解釈している。

(社会医療法人玄真堂理事長・川 巖 眞 人)

\*

\*

\*